

隋唐時代の上層郷邑社会（そのⅠ）

矢 野 主 税

目 次

序 章	問題の所在、「襄陽冢墓遺文」について
第一章	「鄴下冢墓遺文」の場合
第二章	「山右冢墓遺文」の場合
第三章	新しい地方郷邑社会の成立
結 語	

序 章 問題の所在、「襄陽冢墓遺文」について

後漢時代における地方郷邑の実態を考える手掛りとして、私は嘗て、後漢時代の婚姻について調査したことがあった（後漢末期の郷邑の実態について（拙著「門閥社会成立史」所収））。その時、同縣、同郡というような、一定の地域内における地縁性の強い婚姻が一般的ではあったが、郡縣を超えた、超地方的な婚姻もかなり見出せることを指摘した。そのような超地方的婚姻は、中央京師に

において成立したもので、地方から中央へ集中し、そこに生活をかまえた中央官僚家の間に、地域的にも、社会的にも全国性をもつ一つの郷邑、超地方的な社会生活圏が成立していたことを示すものと考えた。

しかし、反面から考えれば、地方から中央に集まった官僚化した家々が、中央において一つの社交界をつくり上げ、超地方的な生活圏をつくり上げたという場合、それは中央官僚という性格によってまとまった特殊の社会であるとはいえず、やはり、京師という地縁を以てつながれた人々の婚姻であったことに間違いはない。従って、婚姻というものは、完全な政略結婚は別としても、一般的には、何等かの地縁性によって成立するものであったようである。

ところが時代が降って隋唐時代となると、中央のみならず地方においても、一見したところ超地方的ともいえる、全国に出身地をもつ人々の婚姻がみられるようになった。勿論、それらは現実には、同縣同郡内の婚姻という地縁性の強いものであったことは、後漢中央官僚間の場合と同様であるが、しかし、社会的には、後漢時代の京師における官僚社会にみた超地方的婚姻にも似たものがあった。以下、私は隋唐時代におけるこのような郷邑の実態の一面を明らかにしながら、それらのことは、どのような歴史の意味をもつものであるか、について考えてみよう。

さて、嚴耕望編「石刻史料叢書」に収めてある「羅氏冢墓遺文」は、羅振玉氏の収録による、地域中心の冢墓史料である。その中に、「襄陽冢遺文」がみえる。そこには襄陽地方から出土した、いくつかの墓誌銘が収録されている。それらの大部分は唐代のもので、張柬之一族（旧唐書（九一）、新唐書（一二〇）に張柬之伝あり）に関するものが多い。いま、これの墓誌銘によって、張氏略系図を示してみよう。

○襄陽張氏略系図

梁、岳陽王諮
策議參軍、蔡州
刺史
周、宣納上
玠士、隋、巴州
錄事參軍
則陽陽縣令

玄弼益州大都督
府參軍
東之（襄州襄陽人）
中書令
景之——嶠
慶之
京兆杜氏
晦之左率府
兵曹參軍
（京兆）韋氏
敬之將士郎
隴西李氏

（范陽方城人）
隴西李氏
（其先范陽方城人）
呼延氏
毖
騏
軫（其先范陽方城人）
河南府參軍
安陽邵氏
愿
吳郡太守
採訪黜陟使
曠穀城令
（范陽方城人）
玠
瑒
瑒
瑒
瑒

《出典》
張玄弼墓誌、張景之墓誌、張慶之墓誌、
張點墓誌、張軫墓誌、張孚墓誌、張軫合
祔墓誌、張肱墓誌、張曠墓誌（以上、襄
陽冢墓遺文、張東之伝（旧唐書九一、新
唐書一二〇）、著作郎張漪墓誌（八瓊室金
石補正五四）

さて、略系図にみる如く、この襄陽張氏一族は元來は范陽方城の出身であつた。それが張策あたりから襄陽附近におちつき、それ以來この地の人となつた如くである。例えばここにみる如く、玄弼については「范陽方城人」と記され、滂、嚱についても同様であつた。ところが拙や孚、軫、點については「其先、范陽方城人」と記されており、更に、束之の新・舊兩唐書の伝には、「襄州襄陽人」と記されている。これは、滂の墓誌に、「范陽方城人」とありながら、「子孫遂家襄陽。」とされ、軫の墓誌に、「寓居襄陽。因爲此土舊族。」とあるように、元來は范陽方城人であつたが、現在は襄陽に移住して旧族といわれるまでの伝統をもつたのであろう。それ故に、「其先、范陽方城人也。……今爲襄陽人也。」と表現された^(拙稿「郡望と土断」『史學研究』百十三号)。参照

しかし、この張氏一族の本当の故郷は、襄州襄陽縣というより、寧ろ襄州安養縣であつたようである。いま舊唐書(39)地理志、山南東道の條をみると、

「鄧城、漢鄧縣、屬南陽郡。故樊城也。宋故安養縣。天寶元年爲臨漢縣。貞元二十一年。……乃改臨漢爲鄧城縣。」

というように、唐代の鄧城縣は、安養縣、臨漢縣と呼ばれた時期があつたわけである。ところが張氏一族の墓地の場合、殆ど安養縣という表現がなされている。例えば、張玄弼墓誌には、

「府君先窆南山。今移與夫人合葬於安養縣西相城里之平原。」

とみえ、張景之墓誌には、

「改卜塋於安養縣之西相城里。移諸兄弟並窆於新塋之内。」

とみえ、張慶之墓誌には、

「與京兆杜氏。同改窆於安養縣西相城里。」

とみえ、張敬之墓誌には、

「改殯于安養縣西、祔先墳、禮也、祔祖廟、祭也。」

とみえ、張漪墓誌には、

「與君合窆於相城之舊塋、王墳之甲、從先也。」

とあり、張軫墓誌には、

「改祔于本郡安養縣相城里、先祖之舊域、禮也。」

とみえる。ただ、張肫墓誌には、

「天寶十三載、……合葬於臨漢縣平原、禮也。」

とみえていて、臨漢縣と表現している。この安養縣は勿論襄陽縣ではない。けれども、張氏に属する人々の、代々の墳墓の地が安養縣（鄧城縣、臨漢縣）であるということは、この地こそ本當の故郷の地であつたのではなからうか。

しかし、張柬之伝には、「襄州襄陽人」とあつたし、かつ、

「子愿、漪……侍父襄陽。恃其家立功。簡接鄉人。鄉人怨之。」

とみえるところによれば、この一家は襄陽縣に住み、そこを故郷としていたかの如くである。

すると、「寓居襄陽」とか、「家襄陽」とかいつても、それは襄陽附近を意味することも、襄陽縣内を指す場合もあつたものかと思われる。例えば、張點墓誌に、

「六代祖策。去魏自南齊。遷官葬葉。因家樊沔。」

とあるのによれば、點の伯父漪の墓誌に、「子孫遂家襄陽焉。」とあるのを襄陽縣と解するなら、少々両者は異つてゐることになる。「樊沔」というのは樊城、沔水のほとりということであろうから、唐の鄧城縣から襄陽縣にまたがる附近をさ

すものであろう。こう考えると、張策やその一族が落ついた先は、汚水と清水の合流地点一帯というのではなからうか。従つて、この一族の中には、「襄陽人」といいながら、現実の生活は襄陽縣でしているとは限らず、鄧城縣で生活している家もあったであらう。襄陽張氏の実際生活は、樊沔一帯で行われ、墓地は鄧城縣におかれていたとみるのが妥当であらう。

さて、襄陽張氏の婚姻の相手はどういう人々であつたらうか。前記略系図によれば、

吳興丘氏、京兆杜氏、（京兆）韋氏、隴西李氏、呼延氏、安陽邵氏

などがみえる。韋氏はあとでふれるように、京兆韋氏とみて誤りあるまい。これによれば、婚姻は全国各地の郡望をもつ家々となされているのが注目される。このことは、いろいろのことを、我々に教えてくれる。

第一には、この樊沔の地に、元來はこの地から遠く離れた土地に、かつて栄えたであらう全国各地の有力氏族の分派が集まっていること。

第二には、それらの家々は、張氏についてみたところから推定すれば、その郡望（旧望）の地をすてて、樊沔の地におちつき、今やこの地の人となつていたであらうこと。

第三には、それらの間に婚姻が行われていることからみて、それらの人々は一種の地方郷邑社会、そういう社会生活圏を形成していたと思われること、などである。

このような、張氏一族を通じて考えられることは、他の家々においても似たようなものではなかつたらうか。まず、第一の点から考えてみよう。「襄陽冢墓遺文」には、張氏以外の家々の墓誌もみられる。その二、三の例をあげてみれば、

安定出身の梁氏（梁嘉運墓誌）、潁川出身の陳氏（同上）、太原出身の王氏（王大劍墓誌）、弘農出身の楊氏（楊孝直墓誌）、

隴西出身の董氏（劉密墓誌）、吳興出身の沈氏（卜瑄墓誌）、

などである。他の多くの家々は省略するが、華北・江南など全国各地の郡望をもつ家々が、祖先伝来の地をはなれて、遠くこの樊沔の地に住みついていたことを示している。

次に第二の点についてみるに、例えば安定出身の梁嘉運について、

「惣章三年、……終於襄陽縣之私第。……夫人潁川陳氏、隆州長史之女也。……以長安四年八月十五日。卒於安養縣之私第。以景龍三年。……合葬於襄州安養縣昇平鄉懷德里之原。」（梁嘉運墓誌）

とみえる。これによれば、梁氏の私第は襄陽縣にも安養縣にもあったようであるが、陳氏は夫の死後安養縣の私第に引上げてそこで卒したと思われること、墓地が安養縣に設けられていることなどからみて、安養縣こそその故郷であり、本貫地であったのであろう。このことは、梁氏が樊沔の地を故郷と定め、そこに根をおろしていたと考えてよいことを示すものである。

或は又、張惟合耐墓誌をみるに、

「本望清河。先祖徙居范陽、今爲范陽人也。」

とみえるから、この張氏の望はもと清河であったが、范陽に移住するに及んで、本貫を范陽につけるに至った、ということであろう。ところが、この墓誌によると、

「貞元十九年、……終於襄陽縣殖業鄉崇教里私第。」

とあるように、惟は襄陽縣の私第で歿し、その妻王氏は貞元五年、夫に先立って死んだが、兩人の墓について同墓誌には、

「貞元廿一年、……合耐歸葬于襄陽縣東津鄉柴村白沙里。」

とみえていて、夫妻は襄陽縣の墓に歸葬されたという。ここに「歸葬」という表現をしているのは、既に張惟の祖先の代から墓地が襄陽縣東津郷に設けられていて、この夫婦はその伝来の墓地に葬られたことを示している。このことは、張惟一家の本貫がなお范陽につけられていたとしても、実際の生活の場所は襄陽にうつっていたと考えられるし、或は、この一家は既に范陽から襄陽に本貫をうつしていたのではないか、と考えることもできる。前者の場合は、本貫地と現住所の分離であって、このようなことは一時的にはなかったわけではなからうし（後述参照）、後者の場合は、清河（旧々望）から范陽（旧望）へ、范陽から襄陽（新望）へと本貫がうつったことを思わせるのである（前掲拙稿「郡望」と土斷参照）。何れにしても、この一家が現実には樊沔の地に生活していたことに間違いはあるまい。

次に、劉密とその妻崔氏の場合を、劉密墓誌と劉夫人墓誌とによってみよう。劉密の出自については、

「其先、望出彭城」

とあるから、「劉氏は元來は彭城の出身であるが、今はその地の人ではない。」（同上拙稿参照）ということになろう。夫人については、「夫人博陵崔氏」とある。ところが夫人について、

「元和九年……終于襄陽郡之私第。……以其年十月六日。建塋于郡東八里漢陰之原。」

とみえ、襄陽郡の私第で死するや、郡治の東八里の地点に塋を設けたと記している。襄陽郡治は襄陽縣であるから、夫人が死んだのは襄陽縣の私第であつたのであろう。一方、劉密については、

「太和五年、……終宜城縣私第。……以太和六年七月十六日。啓崔夫人之殯。與公合祔于襄州襄陽縣東台郷之南原。」

とみえて、宜城縣の私第で死んだ。ところが彼の墓誌によれば、密は元和六年から十一年まで唐州長史であつたが、その後引退し、「優遊別墅。尋繹黃老。」という生活をし、太和五年に宜城縣で卒したのであるから、私第というのは、この別墅のことを指しているといえる。従つて、夫人は襄陽縣の私第で、彼は宜城縣の私第で歿したが、二人合祔の場所は襄陽

縣であつたのであるから、この二人の最終的生活の場は襄陽縣、すなわち樊沔の地であつたとして間違いないであろう。そして恐らくは、本貫も彭城（旧望）から襄陽（新望）に移つていたと考えられる。

更に卜瓘についてみるに、その墓誌には、

「君之先、河東人也。」

とあるので、「瓘の祖先は河東（旧望）の人であるが、今はそうではない。」（前掲拙稿参照）ということになる。しかし、瓘が現在何処の人であるかは記してないので、その私第や墓地によって現本貫（新望）をさぐるより外はない。いま、彼の墓誌によれば、

「曰……顧及生前。得備葬事。夫人子女。號叫嗚咽。不得已而營築墳闕于襄陽縣清平鄉招賢里原、從宜也。後十年。

以長二年九月十四日疾。終于襄陽私第。」

という。すると彼は、その死する十年前に、自分の墓を營築したのであり、その私第は襄陽にあり、その墓は襄陽縣に設けられていた。ただ、この墳墓は「從宜也」とあるから、恐らくは新しく設けられたものであろうか。このように考えてくれば、彼の祖先は河東の人であつたが、彼は今や襄陽の人である、というべきであらうといえよう。

次に、弘農の楊孝直も、その墓誌によれば、

「太和九年、……終於襄州襄陽縣鳳林鄉南津坊之私第。」

とみえ、同年夏に、

「還葬於通泉鄉招賢里之原。」

とみえる。これによれば、太和九年襄陽の私第に死んだ孝直は、同じ年に恐らくは同縣の通泉鄉の墳墓に「還葬」されたという。この還葬というのは、帰葬というのと同義であらうから、通泉鄉の祖先伝来の墓地に葬られた、と解することが

できる。従つて、弘農出身（旧望）の楊孝直の家も、祖先伝来の墓地を襄陽にすでに設け、この地を本貫（新望）としていたと考えてさしつかえあるまい。

以上、「襄陽冢墓遺文」にみえる二、三の家々について、それらが樊沔の地におちつき、そこを本拠地としていたであろうことを述べたが、その他の家々も、同様に樊沔の地をその生活圏としていたと考えて大過あるまい。

次に、第三の点について考えてみよう。それを明らかにする為に、墓誌にみえる婚姻関係について考えてみたい。

さて、張氏の婚姻相手は、前述のように、呉興丘氏、京兆杜氏、（京兆）韋氏、隴西李氏、呼延氏、安陽邵氏がわかつてゐる。すなわち、その相手は全国各地の出身の家々である。ところが、これらの人々が若しそれぞれの郡望の地に住まっていたとすれば、果してこのような婚姻が成立し得たであろうか。しかし、事実としては、江南から河北、或は隴西のような西辺地帯に郡望をもつ家々との婚姻が成立しているわけである。このことは、それらの家々の人々が、襄陽張氏と接触をもちうる土地に住まっていたから可能であつたに相違ない。すなわち、彼等が襄陽或は郢城などの地、樊沔の地に居住し、襄陽張氏と一種の地縁的關係をもっていたからではなからうか。

例えば、襄陽張氏の夫人で、その家系の多少なりともわかるのは、張漪夫人隴西の李氏、張孚夫人呼延氏、張肅夫人隴西の李氏である（それぞれ墓誌参照）。張漪夫人は瀛州司法參軍李昭佑の女である。張孚の呼延夫人は亳州鄆縣令呼延謀の女という。呼延氏は、元和姓纂（三）呼延氏の條に、「匈奴四族有呼衍氏。入中國改爲呼延。」とあり、晋書（一〇三）劉聰載記に、劉聰の部將呼延寔とみえるところの、匈奴出身の呼延氏なのであらう。

もう一人の張肅夫人隴西の李氏については、刑部尚書乾祐の孫、相州堯城縣令昭礼の女、中書令昭徳の姪とみえてゐる（張肅墓誌）。昭礼については明らかでないが、その父乾祐及び兄弟昭徳については、舊唐書（八七）、新唐書（一一七）の李昭徳伝に記述がある。昭徳は「京兆長安人」（旧唐書）、「雍州長安人」（新唐書）と表現されているから、一族の多くは長

安に住し、本貫も長安につけていたものであろう。しかし、昭礼は相州堯城縣令であったので、長安をはなれて地方官として各地を廻って、恐らく襄陽の地におちついたこともあったのであろう。

こう考えた場合、気にかかるのは、同じ隴西李氏の李昭佖のことである。李昭佖一家と李昭礼一家との関係はどうであったろうか。というのは、単に彼等が同じく襄陽に住み、郡望を同じくするというだけではなく、李昭佖と李昭礼という姓名は、昭礼の兄弟が昭徳であった如く、輩行を同じくしているのであって、これから推せば両者は兄弟であったと断定はできないにしても、可なり近い血縁関係にあったのではなからうか。このように、両者が輩行を同じうすることとは、襄陽で同じ生活圏に属していたことを想わしめ、その故にこそ、襄陽張氏と隴西李氏との二重の婚姻関係が成立したのではなからうか。

その他、張軫の妻は安陽の邵氏である（張軫墓誌）。その父祖については不明であるが、舊唐書（一三七）邵説伝には、「相州安陽人」とみえるから、安陽縣に邵氏一族がいたことは明らかで、その分派が襄陽の地に移住したものであろう。

或は又、張慶之の夫人は京兆杜氏である（張慶之墓誌）。梁書（四六）杜崩伝によれば、

「京兆杜陵人也。其先自北歸南。居於雍州之襄陽。子孫因家焉。」

とあるから、襄陽におちついた杜氏一族があったはずで、慶之の妻もその子孫の一人であったと考えても、そう不自然ではあるまい。

では、これらの婚姻は、どのようにして可能であったろうか。第一には、抑もこの襄陽の地は、東晋から南北朝にかけて、北方の人々が南遷する場合、生活の場として選んだ重要地点で（宋書七七柳元景伝、南齊書二四柳世隆伝、梁書一二章慶伝、周書四六杜叔毗伝参照）、ここを生活の根拠地とし、この地を故郷と定めた人々は多かったと考えられる。その中に、京兆杜陵の杜氏、同じく韋氏、（太原）王氏などがあったことは明らかである（拙稿「韋氏研究」（長崎大学文学部社会科学論叢一）、梁書九曹）。従って、張晦之夫人

韋氏は、恐らく京兆杜陵の韋氏とみて誤りあるまい。襄陽に土着したこれら北方名族の人々は、南朝時代ここで上流社交界を形成し、韋氏と杜氏、韋氏と王氏、韋氏と柳氏などの婚姻が行われた（上掲「韋氏研究」及「韋氏研究」(長崎大。彼等学芸部社会科学論叢、臨時増刊号、参照)。彼等の子孫は、隋、唐朝においてもそのような社交グループを形成し、更にその中にあとから襄陽附近に土着した家々を含めて、この地方における上流社会を形成し、それらの間の婚姻が行われたと考えられないであろうか。

次に、これらの婚姻関係をみて注目されるのは、張氏並びにその婚姻相手のみならず、「襄陽冢墓遺文」に墓誌のみえる家々、或はその婚姻相手をも含めて、すべてに共通するものとして、大部分の家々は地方官僚——ここにいる地方官僚は、太守・縣令やその属僚達をも含めて、地方政治にたずさわる官僚の意に用いる——として活動していた家柄であった、ということである。これらの家々は、その点に於て共通する政治的・社会的地位と性格をもっていたわけで、加うるに「樊沔の地」という地縁性を共有しながら、襄陽の地に、地方郷邑社会——生活圏を形成していたと考えられる。このことを、少しく具体的に考えてみよう。

襄陽張氏以外についてみるに、梁嘉運（金州西城縣令の息）の夫人は、隆州長史陳氏の女、劉密（唐州長史）の夫人は、左衛兵曹參軍の孫、大理評事博陵崔興宗の女、楊孝直（鄧州長史）の夫人は成德軍左廂步射兵馬使男承嗣（マ）の女、趙氏（山南東道節度愔管充涇原防秋馬歩都虞候）の夫人は、冀州南宮鎮遏兵馬使譙郡の夏侯萼の女、盧公則（信州玉山縣令）の前夫人は、太原王氏で、池州刺史王傳之の女、後夫人は隴西の李氏で、撫州臨川縣令李讓の女であった（各人の墓誌参照）。

以上の家々は、前にふれた如く、まれに張柬之や李昭徳のような中央高官を出したとしても、一般的には、地方官、それもそれほど有力でない、平凡な地方官僚を出すにすぎぬ家々であったであろう。勿論彼等は、地方郷党社会においては上層階級に属していたに違いなく、それらの家々の形成した社会生活圏の内部で、上述のような婚姻関係が成立していったと考えられる。

以上は襄陽という一地方を例にとって、隋・唐間の地方社会の実態の一面について考えてみたのであるが、このようなことは、他の地方にもみられる普遍的な現象であつたろうか。それとも、襄陽という南北交通の要衝の特殊性によるものであろうか。いま、その点をたしかめ、問題点をより具体的に検討する為に、他の地域の家墓遺文について検討してみたい。

第一章 「鄴下冢墓遺文」の場合

ここでは、鄴城附近―隋の魏郡・唐の相州一帯―出土の隋唐時代の遺文、「鄴下冢墓遺文」、及同「二編」(何れも羅振玉が、石刻史料叢書には収めてない)を資料として、郷邑社会の実態を考えてみよう。そのために、前に「襄陽冢墓遺文」の場合にみたのと同様に、第一には、どのような郡望をもつ家々がこの地方に集まっていたのか、第二にはそれらの家々は、果してその旧来の本貫地(郡望)をすてて、この地方に本貫(新望)をうつしたか、現実にそこで生活し、墳墓を設けたか、第三には、それらの家々との婚姻関係によって結ばれている人々が、この地方において一種の上層社会生活圏を形成していたことを明らかにすることができるか、などについて考えてみたい。

先ず、第一の点からみるに、相州地方に集まっていた家々としては、

西河出身の任氏(任顯墓誌)、太原出身の王氏(王曜墓誌)、上谷出身の張氏(張景略墓誌)、南陽出身の張氏(張評墓誌)、渤海出身の高氏(高德墓誌)、煥煌出身の康氏(康愼墓誌)、蘭陵出身の蕭氏(蕭俱興墓誌)、清河出身の張氏(張宰合附誌、他、二墓誌)、弘農出身の楊氏(楊君檀夫人墓誌、他、一墓誌)、隴西出身の李氏(蕭遇墓誌)、武威出身の殷氏(殷子墓誌)。

などがみえる。勿論これらは、郡望の明らかな家々の半ばにもあたらず、その外に又、郡望の明らかな家々も数多く見えている。これらのことは、この鄴城周辺の相州各縣には、非常に多くの、元来この地の出身ではない家々が集まって

いることを示している。その中には鄴城に割合近い場所の家も多いのではあるが、極めて遠い地域から移住している家々も多いのであって、いわば全国各地から——ここにみる限りでは江北中心のようにみえるが——相州に集まった、多くの家々があった、といえそうである。

では、次に第二の点について考えてみよう。この「鄴下冢墓遺文」にみえる家々に属する人々は、その郡望の地をなされてこの鄴城地方に本貫をうつし、ここを新しい故郷として、定着した生活をしていたのであるうか。すなわち、彼等も早、太原の人とか、隴西の人とかではなくて、相州某縣人となったのであろうか。

さて、これら「鄴下冢墓遺文」をみると、その出身地について、

第一、郡望（旧望）のみを記している場合

第二、郡望を記しながらも、現在はそこにいるわけではないことを示している場合

第三、現在の本貫（新望）を明らかにしている場合

の三様の記し方があった。この出身地記述の変化は、郡望から現本貫への、實際生活並びに意識の変化を示しているように思われる。あとでふれるように、これらの人々の墓地は殆ど相州内に設けられているのであるから、現実には殆どすべての人々が、相州に定着し、生活していたと考えられる。

まず、第一に属する表現の二、三例をあげてみると、

「西河人也」〔任顯墓誌〕、「井州太原人也」〔王才及夫人墓誌〕、「燕州上谷人」〔張景略墓誌〕、「潁川長社人也」〔陳叔度墓誌〕、「北海益都人也」〔崔夫人墓誌〕

などとみえる。このように、郡望は記しているが、現住所などを推測せしめる記述は一切ない。

次に第二の場合をみるに、その記述に二つの様式があった。

まず、先祖伝来の郡望のみをあげるもの、例えば、

「其先、渤海人也」〔高德墓誌〕

「其先、河内郡人也」〔常惲合葬銘〕

「其先、南陽人也」〔處士宋君甘夫人墓誌〕

の如き場合と、このような記述の次に、現住の地をあげているもの、例えば、

「其先、太原人也。子孫奔棄。因官相部。家焉。」〔王忌墓誌〕

「南陽白水人也。……大業之季。遷邑滏陽。」〔張祖墓誌〕

「弘農人也。祖祢因官。遂居此矣。」〔楊君檀夫人墓誌〕

「其先、平原人也。遠祖因官。遂家于鄴。」〔高荆玉墓誌〕

とみえる如きがあった。この「其先云々」という表現は、元来はそこを本貫（郡望）としていたが、今はそうではない、の意であることは既に論じた（前掲拙稿「郡望と土断」）。従って、この二者は共に、今は郡望の地をはなれて、別に本貫（新望）を設けている、今は新しい土地に居住している人々であった。

次に第三の場合は、郡望にふれるものもあれば、全くふれないものもあるが、共に現在の本貫（新望）をはっきりと示していることは同様である。いま、二、三の例をあげると、

「本望南陽。相州林慮縣人也。」〔張士高墓誌〕

「其先、渤海人也。……遂留相土。今爲安陽人也。」〔高珍墓誌〕

「廣平列人也。……因官徙居鄴。遂爲相州安陽人焉。」〔靖策墓誌〕

「其先、武陽人也。因官宅此。遂爲林慮人焉。」〔苑策合遷誌〕

「其先、出自武威。因官河北。今爲安陽人也。」(段子墓誌)

とみえる如きである。ここでは、第二の場合にくらべ、一步をすすめて、新しい土地の人となったことを明記している。更に、注目されるのは、このように一応は郡望も記しておくこともせず、全く現本貫(新望)のみを記している場合もあった。例えば、

「相州安陽縣威化鄉曲溝管之人也。」(蕭子昂墓誌)

とみえるものは、恐らくは蘭陵出身の蕭氏が相州におちついたものと思われる。

以上のような出身地の表現の変化は、郡望にこだわる表現が漸次崩れつつあったことを示すようである。郡望に固執する人々もあったにしても、昔はその地に先祖がいたという考え方、更に、昔はそうであったが今は全くこの地の人間だという考え方をする人々が漸次多くなったであろう。このように郡望を離れてゆく態度は、やがては全くそれを否定する態度にゆきつくのも亦当然であったろう。

ただし、例えば張漢墓誌に、「因爲安陽人焉。」とみえるように、現在は既に安陽に本貫をうつしていると明言しながらも、なおその墓碑に、「唐故振威副尉清河張君墓誌銘」とみえるのは、郡望をふり返る気持は仲々抜き難いものがあったことを示すようである。けれども、その反対に、高荆玉墓誌のように、「其先、平祖人也。遠家于鄴。」というように鄴に移住したことを認めても、「鄴人」となったことを明言しない記述をしながら、その墓碑には、「唐鄴郡故高君墓誌銘」と鄴郡出身を明記しているのをみれば、やはり歴史の流れは、旧望(郡望)を脱して新望(現本貫)へというものであったと理解すべきであろう。

さて、このような郡望(旧望)に対する態度は、これらの家々が現本貫(新望)の地に、既に全く落着いていることを示すものであろう。そのことを最もはっきり証明するものは、これらの家々がその墓地を相州の各縣、或はその隣接地域に

設けていることであろう。

例えば、墓地の所在地は次のように分類できる。

(1) 相州安陽縣と記すもの

任顯墓誌、王曜墓誌、張景略墓誌、蕭俱興墓誌、張宰合祔誌

(2) 魏郡城、郡城と記すもの

張忬墓誌、高荊玉墓誌、處士暴莊墓誌、辛庭墓誌

(3) 相州城、州城、州と記すもの

高德墓誌、王才及夫人墓誌、王愛墓誌、高珍墓誌、康愨墓誌、李二墓誌、張夫人墓誌、梁方墓誌、馬師墓誌、張易墓誌、杜欽墓誌、蔡元雪夫人楊氏墓誌、蕭子昂墓誌、王君墓誌、蕭遇墓誌、蕭舉墓誌、楊君檀夫人墓誌、高守墓誌、處士宋君、甘夫人墓誌、張漢墓誌

(4) 相州林慮縣と記すもの

梁義方墓誌銘、□君墓誌銘、苑策合遷誌、寂恭及夫人墓誌、常惲合葬銘

(5) 相州鄴縣と記すもの

張興墓誌、陳叔度墓誌

(6) 相州湯陰縣と記すもの

徐懷隱墓誌、王忌墓誌

(7) 相州零泉縣と記すもの

諸葛明愨及夫人墓誌

(8) 相州内と記すもの

王天墓誌、靖策墓誌

(9) 相州隣接地域のもの

衛州隋興縣、崔夫人墓誌、磁州滏陽縣、張祖墓誌

(10) 鄧州南陽縣と記すもの

劉伏墓誌

これらの中、明らかに相州に属しないものは、(9)・(10)に属するものであるが、(9)に属するものは相州に隣接する地帯で、相州という地域に含めて考えられないことはない。ただ(10)の場合は明らかに相州とは無関係である。

以上によって明らかのように、「鄴下冢墓遺」にみえる家には、殆ど相州内にその墓地を設けている。前述のように、出身地に関する表現には種々の相違があったとしても、特に例えば、任顯、王曜、張景略には郡望のみしか記していないか、断じてさしかえないのはあるまいか（拙稿「東晋における南北人対」立問題（史学雑誌七七一〇））。

しかも、それらの墓地について、例えば今は「林慮人」といわれる苑策について、

「遷合於相州林慮縣西南四里府君之舊塋」（苑策合遷誌）

とみえ、同じく今は「林慮人」とされる寇恭について、

「合葬於林慮縣西北一百步舊塋」（寇恭及夫人墓誌）

とみえ、出身不明の蔡元雪について、

「自上黨扶護。歸葬于相州西南廿里平原」（蔡元雪夫人楊氏墓誌）

とみえ、今は鄴に住みついたという高荊玉について、

「殯於郡城西北二里家塋」(高荊玉墓誌)

とみえ、今は「鄴中人」という暴荘について、

「合祔於鄴城東南一里先人塋」(處士暴莊墓誌)

とみえ、今は「安陽人」という蕭季について、

「同窆於相州城西卅里高平渠南五十步舊塋」(蕭季墓誌)

とみえ、「太原人」とのみしか記していない王君についても、

「就相州東北三里古北王村塋」(王君墓誌)

とあり、同じく太原王氏であるが、今は相州に居住するという王忌について、

「遷葬于相州東南參拾里湯陰東北渠里高村東貳百步先祖塋」(王忌墓誌)

とみえるなど、その出身地についての表現の相違とは関係なく、「舊塋」「歸葬」「家塋」「先入塋」「先塋」「先祖塋」などとその墓地について表現されている如く、「先祖傳來の墓地」に葬られたといわれる人々が多かったのである。このことは、これらの人々の属する家々の、相州における生活の歴史が、決して短いものではなかったことを証するもので、この地が彼等の祖先伝来の墳墓の地であったことを示すものであろう。勿論、舊墓とか、歸葬とか、先入塋とかの表現が記していない場合であっても、実際にはそういう「先祖の塋」であったということは、普通のことではなかったであろうか。

では、第二点として、これらの人々は、この新しい郷邑で、このような地縁性に立って、どのような婚姻関係を結んだであろうか。それらの例を一々あげるのは煩雑なので、夫人の出自の明らかなものに限って例示してみよう。

(1) 南陽張惇夫人樂陵東門氏(張惇墓誌)。

- (2) 南陽張興夫人漢陽趙氏(張興墓誌)。
- (3) 潁川陳叔度夫人太原斛律氏(陳叔度墓誌)。
- (4) 安定梁方夫人南陽張氏(梁方墓誌)。
- (5) 安定梁義方夫人潁川陳氏(梁義方墓誌)。
- (6) 太原王忌夫人扶風傅氏(王忌墓誌)。
- (7) 南陽張易夫人彭城劉氏(張易墓誌)。
- (8) 趙郡寇恭夫人太原王氏(寇恭及夫人墓誌)。
- (9) 蔡元雪夫人弘農楊氏(蔡元雪夫人楊氏墓誌)。
- (10) 相州蕭子昂夫人清河張氏(蕭子昂墓誌)。
- (11) 清河張再讓夫人樂安孫氏(張宰合祔誌)。
- 清河張再□夫人潁川陳氏(同右)。
- 清河張再楚夫人隴西李氏(同右)。
- 渤海高氏夫人清河張氏(同右)。
- 彭城劉氏夫人清河張氏(同右)。
- (12) 蘭陵蕭遇夫人隴西李氏(蕭遇墓誌)。
- (13) 魏郡元氏夫人北海崔氏(崔夫人墓誌)。
- (14) 南陽張祖夫人趙郡李氏(張祖墓誌)。
- (15) 蘭陵蕭舉夫人南陽張氏(蕭舉墓誌)。

ここにみる、いくらかの例でも明らかなように、郡望からみれば全国各地の出自の人々が、相州の地において婚姻を結んだことになる。しかし、それらの郡望が、彼等の実際の生活の根拠地であつたならば、このような全国にまたがる婚姻の成立が可能であつたろうか。ところが、実際にはそれが可能であつたのであるから、彼等はその郡望とは関係なく、この相州の地に現実の生活の場をかまえていたに相違ない。例えば、上引張宰合附誌によれば、清河の張宰の子再讓以下男女五人の兄弟姉妹が、それぞれ樂安孫氏、潁川陳氏、隴西李氏、渤海高氏、彭城劉氏と婚している。すなわち、清河張氏兄弟姉妹と、これら五氏との婚姻が相次いで行われているわけである。そのようなことが可能であるためには、張氏を含めたこれら六氏が、同一の社会生活圏に——地域的にも社会階層的にも——属していたからと考えるより外に、考えようがないのではなからうか。その他の諸例も、同様にして同一の社会生活圏に属していたが故に、その婚姻が可能であつたと考えられるであらう。

このことは、これらの人々の墓地が相州という地域に設けられたことや、王忌墓誌、蕭拳墓誌その他にみえたように、先祖伝来の墓地が多かつたであらうということや、更に恐らくは、墓誌に明記していない家々でも、祖先伝来の墓地をこの地に設けていたと推察されることなどと共に、「鄴下家墓遺文」にみえる家々は、相州において安定した生活を代々に亘って送っており、完全に相州の人になり切っていたことを証するものである。

更に、以上の婚姻のうち、夫人の祖先の政治的地位の明らかなものをみるに、

(1) 張興墓誌

冀州信都縣令 虞 瀛州河間縣令 才 揚州江都縣丞 興

漢陽趙徽 辰州辰溪縣令 夫人 趙氏

(2) 陳叔度墓誌

營州刺史 — 德茂 右武衛大將軍 — 敦 勳威府司兵 — 叔度 監門校尉
斛律文端 驃騎將軍 — 又 永州司馬 — 夫人 + 斛律氏

(3) 蔡元雪夫人楊氏墓誌

元雪 澤州司馬 + 夫人
弘農楊崇昭 中郎將 楊氏 翊府夫人

(4) 崔夫人墓誌

魏郡元氏 淮南化明縣丞 + 夫人 崔氏
刺史 — 樂安太守 — □ — 夫人 崔氏

とみえる。このような僅かばかりの例ではたしかないかも知れぬが、これらの婚姻は、中央の高級官僚家間のもではなく、むしろ代々地方官僚として活動していた家々の間におけるものであったようである。前述の婚姻の多くも、恐らくはこれらと似たもので、相州に定住し、そこで交際のあった家々の間の、地方的性格の強い官僚家間におけるものではなかったろうか。他の地方から移り住んでこの地の住民となった家々は、第三章でふれるように、官僚として赴任することによってこの地に定着したのであったから、これらの人々は自らそこに、相似た社会階層の人々と共に社会生活圏を構成し、その中で、上にみたような婚姻関係を成立せしめたものであろうか。

第二章 「山右冢墓遺文」の場合

ここでは、羅振玉氏が「山右冢墓遺文」及同「補遺」(何れも「石刻史料叢書」に収録)として収録した、隋の上黨郡、唐代の潞州―相州の西方隣接地帯―を中心とした地方の、隋唐に亘る墓誌を材料として考えてみたい。

ここでも第一章にならって、第一には、その地にどのような郡望をもつ家々が集まっていたのか、第二には、それらの家々はこの地に本貫をうつし、この地で生活し、この地の人になり切っていたのか、第三には、それらの家々の間の婚姻関係はどうであったか、それによって、この地方に、それらの家々による、一種の上流階層の社会生活圏が成立していたと主張できるのかどうか、というようなことについて考えてみたい。

まず、第一の点から述べることにするが、この潞州における墓誌銘は極めて多く、その中には郡望を記さぬものや不明のものも可なり多く、郡望の明らかものも、一々数えあげるのは煩雑にすぎるので、極めて簡略に説明したい。

さて、郡望はやはり潞州に近い地方の出身のものが一番多い。例えば、太原出身の王氏(王達墓誌、王才墓誌、郭敬墓誌、郭本墓誌等)、清河出身の崔氏(崔石墓誌、崔玉墓等)、南陽出身の張氏(張濟墓誌、張石墓誌等)、等の如くである。

一方、必ずしも潞州に近くない隴西出身の牛氏(牛延宗墓誌、牛高墓誌等)、同じく隴西の梁氏(梁處士墓誌、或は安定出身の梁氏(梁春墓誌)、咸陽出身の秦氏(秦愛及夫人、王氏墓誌)、彭城出身の劉氏(劉建墓誌)、淮南の雍氏(雍君墓誌)の如きも可なり多い。

その他、潞州との地理的遠近にかかわりなく、全国各地の郡望をもつ家々が見出されるが、中でも丹陽出身の陶氏(陶德墓誌)、樂安出身の孫氏(孫德墓誌)の如く、いわば江南系統の家かと思われるものすら見出せる。

以上のように、この潞州の地には全国各地から、多くの家々が移住していた、といえそうである。

では第二に、これらの家々と潞州の地とは、どういう関係にあったであろうか。これらの人々は、果してこの地に生活をおちつけ、ここに本貫をつけ、ここを郷邑としていたのであるうか。その点を明らかにするために、第一章で行った方法で考えてみよう。

第一に、その墓誌に郡望のみを記した場合に属するものは、例えば、

「金城人也」〔申屠暉光墓誌〕、「井州太原人也」〔王裕墓誌〕、「太原人也」〔王才墓誌〕、「南陽白水人也」〔張濟墓誌〕、「晋陽人也」〔郭雲墓誌〕、「太原人也」〔郭本墓誌〕、「北平人也」〔田意真墓誌〕、「井州上黨人也」〔李冲墓誌〕、「蒲州河東人也」〔樊寬墓誌〕、「平陽人也」〔賈文行墓誌〕、「隴西人也」〔董冬墓誌〕、「樂安人也」〔孫德墓誌〕、「新平郡人也」〔馮名墓誌〕、「清河人也」〔解君夫人張氏墓誌〕、「南陽荊州人也」〔□靜墓誌〕

などがみえる。ここにみる限りでは、全国各地の郡望をもつ人々がみえ、それらが潞州の人物であるという証拠はないかの如くではあるが、しかし、これらのうち、田意真、郭本、郭雲、張濟、王才、王裕、王景詮、申屠暉光などは、後に記す如く、それぞれ潞州内の各縣にその墓地をもっており、南陽荊州の人という「□靜」にしても、その墓誌によれば、上黨郡に生活し、潞州に葬られたといっているから、潞州に定着していたと考えてよく、新平郡の人という馮名にしても、その墓には、「大周上黨郡馮名墓誌銘」と刻まれているから、明らかに本貫を上黨につけていたと考えられる。従って、これらの人々は、表面的には潞州とは無関係のように見えながら、実際には潞州各地に定住していたことが伺える。しかも面白いことに、この郡望のみしか称しない表現は、かなり少くなくつつあったかの推測がなされうる。というのは、「山右冢墓遺文」の中に、九面の墓誌をもつ清河崔氏の場合、第一の場合にあたるもの、すなわち、「清河人」とのみ称するものは全く見えず、太原王氏の場合、十一面の墓誌をもつにかかわらず、第一の場合に属するものは僅かに三面にすぎず、隴西李氏の場合、三面の墓誌があるのに、第一の場合は全く見えないからである。ということは、これらの家々の

大方の墓誌には、郡望の外に、郡望（旧望）から現本貫（新望）への移住を示す、何等かの記述があったわけである。このことは、郡望のみを称する人々が、漸次少くなりつつあったことを示すものであろう。

次に、第二の場合、すなわち郡望を記してはいるが、現在はそこにはいない場合、例えば、「其先、河東人也」（柳君墓誌）、「其先、陳留人也」……遠祖從官。因居於潞長子縣焉。（蔡崇敏墓誌）というような表現がなされている場合である。それらの例をあげると、

- (1) 「本陳留郡人也。先祖從官屈潞。因而家焉。」（蔡儒墓誌）
- (2) 「其先、陳留人也。……遠祖從官。因而居於潞長子縣焉。」（蔡崇敏墓誌）
- (3) 「本松栢并州人也。遷居潞□龍潛處向四紀焉。」（田万章墓誌）
- (4) 「隴西人也。李嵩之洪胤。因官遂居此邑焉。」（李買墓誌）
- (5) 「公……南陽人也。……祖諱斌……遂居潞也。」（張周抗及夫人何氏墓誌）
- (6) 「太原人也。遠祖鍾晋朝上黨太守。子孫因而家焉。」（王貞隲墓誌）
- (7) 「望本太原。蓋遠祖也。官遊上黨。子孫因而家焉。」（王守廉墓誌）
- (8) 「清河人也。遠祖從官上黨。子孫因而家焉。」（崔嚴墓誌）
- (9) 「清河人也。因官上黨。封屯留侯。」（崔石墓誌）

の如くである。この外、十例を省略したので、合せて十九例が見出せるわけである。これらは、常に「其先某地人」とか、「本某地人」とかの表現をとっているわけではなく、単に「清河人」「隴西人」という表現をとっている場合もある。しかし、そのあとに、「遂居某地」「子孫因而家焉」とかの表現があることからみて、内容的には同じものと考えられる。このような場合は、郡望はあげながらも、既にそれは旧望にすぎず、現在は別に本貫を設けていると考えられることは、

以前に明らかにしたところである（前掲拙稿「郡望」と土断参照）。

ところが、このような表現を更に一步をすすめて、郡望をあげながらも、現在は別の地に移住し、その地の人となり、そこに本貫をつけていることを、明確に主張している墓誌も多い。これが、

第三の場合である。いま、それらの例の一部をあげれば、次のようである。

- (1) 「夫人令望北平。……數代居漳濱。爲潞人也。」（田氏夫人墓誌）
(2) 「其先、隴西人也。隋朝徙居上黨。遂爲上黨人焉。公季子希玉任幽州莫樂府折衝。轉居范陽。今爲范陽人也。」

（李経墓誌）

- (3) 「上黨人也。其先自太原。遠祖因官上黨。子孫遂爲土人焉。」（郭馮德墓誌）
(4) 「金城人也。因官宅此土。今爲縣人焉。」（申屠行墓誌）
(5) 「先望咸陽人也。……因遠祖官遊。卽爲壺關人焉。」（秦愛及夫人王氏墓誌）
(6) 「丹陽人也。因官遷居。遂爲潞城人焉。」（陶德墓誌）
(7) 「隴西之貴族。……因官播遷。今爲上黨潞城人也。」（牛高墓誌）
(8) 「廣平郡也。昔祖上黨太守。子孫因而卜居。今爲屯留人也。」（程丞墓誌）

この外に十四例をみるので、全部で二十二例をかぞえる。これらの墓誌には郡望をあげてはいるが、しかし、「今爲屯留人」というように、現在は別に本貫をもっていることをはっきり述べているのが特徴的である。ということは、郡望は最早過去のものであることを示しているといえよう。例えば、前引の「先望咸陽人也。……卽爲壺關人焉。」という時、郡望は先望であって、現望（新望）ではないことを、はっきり主張しているといえるからである。

とはいえ、この場合と雖も、なお郡望を記しているということは、郡望に対する執着は仲々断ち難いものがあったのか

も知れない。しかし、それもやがて全く郡望を否定し、郡望にとらわれない考え方に進んでゆくのは当然であろう。そう
なってくると、墓誌には現本貫のみしか記されないことになる。例えば、

- (1) 「潞州上黨人也」 (田玄善妻張氏墓誌)
- (2) 「潞州壺關人也」 (王明墓誌)
- (3) 「上黨屯留顯陽鄉孝義里人也」 (崔玉墓誌)
- (4) 「屯留人也」 (崔通墓誌)
- (5) 「潞州屯留人也」 (崔言墓誌)
- (6) 「上黨屯留縣積石鄉東村人也」 (崔礼及弟進墓誌)
- (7) 「上黨壺關人也」 (暴永墓誌)
- (8) 「潞州上黨人也」 (暴廉墓誌)
- (9) 「上黨壺關人也」 (申穆墓誌)
- (10) 「上黨長子人也」 (范沼墓誌)
- (11) 「上黨襄垣人也」 (韓昂墓誌)

などとみえるが、この他になお十例をあげることができる。

こうみえてくると、既にのべたように、郡望のみを誌す墓誌は比較的少く、大部分のものは、第二、第三の場合に属する
わけで、すなわち、何等かの形で郡望を否定する内容をもつものである。勿論、第二の場合は、それほどはっきりと郡望
(旧望)を否定して、現本貫(新望)を打出しているわけではない。けれども、第三の場合は明らかに郡望から現本貫への
変化を示している。かくて、郡望から現本貫地重視への歴史の流れは否定できないと思われる。

更に、このような「郡望否定」と「現本貫肯定」という歴史の流れをはっきり示すものは、これらの人々の潞州における墓地の設定である。嘗てのべたように、墓地は故郷に設けられ、そこに帰葬するのが礼であるとされていたが、その反対に、墓地が設けられるとおのずからそこが故郷となつていった（東晋における南北人対立問題―その（社会的考察）―（史学雑誌七七―一〇））。このことから言へば、時には幾代にもわたつてそこに住み、現実の生活をそこで送り、その地に墓地を設けることになれば、その地は自らその人々の故郷、新しい望となつたであらう。前掲李經墓誌の記事は、そのことを明らかに示している。

ただし、現住所や墓地の所在地、必ずしも本貫地ではない、ということもあつたかも知れない。例えば鄭仲連墓誌によれば、

「公諱仲連、族鄭氏。……今爲滎陽人也。」

とあるから、この人は卒する時まで滎陽鄭氏を称し、本貫を滎陽につけていたと考えねばなるまい。ところがその墓地をみると、

「（宝曆二年）遷神於潞府城東北關村之平原。以夫人馮氏附焉。從宜也。」

とみえるから、恐らく仲連とその妻は潞州府城内に住み、そこを現住地としながら、その死後、潞府城外の墓地に葬られたのであらう。このような場合、一般には「葬于某地、禮也」という形式の記述がなされるが、ここで「從宜也」とあるのは、ここが従前からの鄭氏の墓地で、当然そこに帰葬した、という如きではなく、新たに設けられた墓地であることを示しているのであらうか。このように、現住所必ずしも本貫とはならなかったこともあつたであらう。

或は又、劉建墓誌によると、

「漢室本宗。彭城是望。……于前數代。不復彭城。今卽燕人也。」

とあるから、元來彭城劉氏に属していた劉建一家が、燕にうつつて數代にして、も早彭城にかえらず、燕におちついて、

その人となったことを示し、今や本貫は燕につけられていたといえる。ところが、

「今乃兆遷潞城西南□里之原、禮也。」

とみえるところによれば、劉建の墓地は潞城郊外にあったわけで、しかもそこに葬るのが「禮也」とあるところによれば、その地の劉氏一家の墓は、必ずしも建の時から始まったとは断定し難いであろう。この場合は、潞州が本貫地となつたか否かは明言できない。

しかしながら、例えば中層行墓誌にみるように、その本文には、

「金城人也。因官宅此土。今爲縣人焉。」

とあって、郡望（旧望）を一応表面に出しているけれども、その墓誌銘は、

「唐故潞州潞城縣申屠君墓誌□」

と刻まれていて、彼の新しい本貫が掲げられており、しかもその潞城縣にこそ、彼の一家の墓は設けられていたので、その墓誌には、

「（景龍三年）合葬於潞城縣西南一十五里平原、禮也。」

とみえる。このように、その地に居住し、その他に墓地を営めば、自らにしてそこに本貫をうつし、そこを故郷とする状態が生まれてきたと考えられる（馮名墓誌参照）。

では、この「山右冢墓遺文」にみえる人々が、何処にその墓地を設けていたかを調査してみよう。彼等の新しい故郷をさぐる為である。

出典	本貫表 現区分	墓 地 所 在
(1) 蔡儒墓誌	第二	葬於丹城西北七里德讓鄉礼度里之別業、壬地創塋安厝、礼也。
(2) 蔡崇敏墓誌	第二	合葬于長子縣城西北〇里原、從吉兆也。
(3) 田玄善妻張氏墓誌	第三	殯於州城東五里。
(4) 田意真墓誌	第一	婦葬於郡城西南五里太平鄉南陶原村。
(5) 田万章墓誌	第二	遷窆於府城西南五里先祖塋內。
(6) 田氏夫人墓誌	第一 (李氏)	(夫、隴西李氏)、遷窆於潞城府城西南三里泉村西南一里平原、礼也。
(7) 李買墓誌	第二	合葬于屯留縣西卅里之原、礼也。
(8) 李素墓誌	第三	合葬於桃湯村西南一里平原、礼也。
(9) 李經墓誌	第三	卜葬於縣東北二里千齡鄉平原、礼也。
(10) 郭本墓誌	第一	附窆於靈閔城南十五里平原、礼也。
(11) 郭馮德墓誌	第三	合葬于州城東南廿五里平原、礼也。
(12) 郭件墓誌	第三	附葬於西廿里平原、礼也。
(13) 郭雲墓誌	第一	(葬) 於長子城東南十里高原、礼也。
(14) 郭全豐及夫人宋氏墓誌	第三	合附於宣泉村一里平原之、礼也。
(15) 張濟墓誌	第一	合葬長子城西北二十五里平原、礼也。
(16) 張石墓誌	第三	殯於潞府城西七里景雲之原、礼也。
(17) 張周抗及夫人何氏墓誌	第二	神柩掃厝于塋側。……宅兆于潞府長子縣西北一里、大塋之右、□故附焉、礼也。
(18) 王才墓誌	第一	合葬于長子城西北五里平原、礼也。
(19) 王裕墓誌	第一	同窆於長子城西北十里之原、礼也。
(20) 王明墓誌	第三	合葬於内村西三里之原、礼也。
(21) 王達墓誌	第三	合葬於長子城東南平原、礼也。
(22) 王貞墓誌	第二	合葬於上党郡城西南廿里之原、礼也。

(23) 王景詮墓誌	第一	合葬于長子縣城西北三里原之旧塋、礼也。
(24) 王守廉墓誌	第二	合葬於壺関縣南□仙鄉□集村北平原、礼也。
(25) 王文進墓誌	第三	葬于縣城北三里□村長崗、礼也。
(26) 王琮祐附墓誌	第二	祐附于丹城北原二里、椒買新塋平原之、礼也。 ^(マ)
(27) 崔玉墓誌	第三	葬在顯陽鄉平原之地。
(28) 崔通墓誌	第三	合葬於村東北二里之平原、礼也
(29) 崔言墓誌	第三	葬於縣城東南廿里平原、礼也。
(30) 崔嚴墓誌	第二	合葬於縣城西北卅里之原、礼也。
(31) 崔石墓誌	第二	葬於屯留縣東北卅里平原、礼也。
(32) 崔虞延墓誌	第二	葬於所居西北一百五十步原、礼也。
(33) 崔昭墓誌	第二	同葬于屯留縣東北廿五里南崔蒙村東北一里平原、礼也。
(34) 崔礼及弟進墓誌	第三	改葬於家西北壹佰步、安其地。
(35) 處士申堵宝墓誌	第二	合葬於潞城縣西北二里之高原、礼也。
(36) 申屠義墓誌	第三	遷神垣窆於州西北二十里平原、礼也。
(37) 申屠行墓誌	第三	合葬於潞城縣西南一十五里平原、礼也。
(38) 申屠公墓誌	第一	遷奉於崇道村百步之原、礼也。
(39) 申屠暉光墓誌	第一	閭室村西北一里、宅兆于平原、用安神位合附、礼也。
(40) 申屠府君及夫人賀氏墓誌	第三	合附於閭室村西北羊里平原之垆也。
(41) 暴永墓誌	第三	葬壺関城西十有五里慈澤鄉行義里。
(42) 暴賢墓誌	第二	葬在潞州城西八里。
(43) 暴廉墓誌	第三	葬於州城西一十六里。

ここに引用したのは、「山右冢墓遺文」のうち、同族のある家のもののみである。このような方法をとったのは、これらの一族達が、どのような土地に墓地を設け、どのようにその土地にとけこんで行ったかを知るのは、比較する相手があ

る方が便利だからである。又、この表に、「本貫表現區別」とあるのは、この地方にうつり住んだ人々が、出身地についてどのような表現をしているかを、前述した区分の順に、第一、第二、第三の區別として示したものである。

さて、この区分に従って、その数を整理すると、第一の場合が十例、第二の場合が十四例、第三の場合が十七例となる。ここでも、郡望のみを主張するものは可なり少いので、郡望否定への傾斜ははっきりしている。

以下、それぞれの墓誌によりながら、移住の状態について考えてみよう。

まづはじめに、北平出身の田氏についてみるに、州城、郡城、府城の周辺に葬ったといっているが、田玄善の場合は、「潞州上黨人」といっているから、州城とは潞州城のことであり、府城は潞州大都督府城の略であろう。一般には潞府城（田氏夫人墓誌、張石墓誌）といわれたようである。郡城とは、田意真が元和十二年「上黨私第」に歿していることからみて（田意真墓誌）、上党郡城の意であろう。ところで潞州の治所は上党縣であるから、この三者は表現は異っていても、同じ上党縣に葬られたと考えてよい。勿論、それだからといって、直ちに墓地も同一地にあつたことにはならないが、田意真と田万章の場合は祖父と孫との關係にあり（田万章墓誌）、何れも城の西南五里の地に葬られて、而も意真の墓誌には「歸葬」といい、万章の墓誌には「先祖塋内」とあることからみて、田氏の先祖代々の墓が、ここに設けられていたと考えられる。従って、潞州上党の人と称した玄善一家は勿論のこと、第一、第二の場合の表現をとりながらも、実際には先祖代々の墓地をこの地に営んでいた意真一家も、共に上党縣において定着した生活を送っていたことにはかわりはなかった、といえそうである。

次に太原出身の郭氏についてみよう。その墓地は、壺関城、（潞州城、（潞城縣、長子城（上党縣）、宣泉村などともえる。これによれば、郭氏は上党、潞城、長子城の各地に分散して生活していたようである。壺関城というのは上党のことであろう。このうち、郭馮德については「上黨人也」といい、郭件については、「潞城縣人矣」といい、郭全豊について

は、「上黨雄山郷人焉。」といわれている如く、これらの人々は完全にこの地の人となっているようである。郭馮德墓誌には、「遠祖因官上黨。子孫遂爲土人焉。」とみえているから、これも土着の人となり切っていたのであろう。郭本や郭雲については、郡望を記すのみであるが、壺関城や長子城周辺に葬ったことからみて、彼等が他の三者同様、潞州の地におちついたことは間違いないまい。この一族五人中三人が、第三の区分に属することは、これらの人々の親縁関係は明らかにし難いとしても、すべての人々が潞州の地にとけこんでいた、と考えてもよいのではあるまいか。

次に南陽出身の張氏についてみよう。ここではその墓地は、長子城、潞府城の周辺に設けられている。すなわちこの一族は、張石墓誌に、「終于潞府上黨縣臨泉郷私第。」とあるように、上黨縣に居住し、潞府城の西七里に墓地を設けた一派と、長子城西北方面に墓地を設けた一派とがあったわけである。張周抗及夫人何氏墓誌によれば、抗の祖、斌について、「斌爲尉長。□秩滿□志□□。遂居潞焉。」というから、斌の時代以来、この地におちついていたものであろう。その故にこそ、抗が死んだ時のことについて、「神柩歸厝于塋側」とみえて、抗以前既に旧塋があったことを示す記事があるのが了解できるのである。この一族の場合も、現実の生活と共に墓があったといえよう。

最後に、太原出身の王氏について考えよう。いま上引の九人の墓誌をみるに、その墓地の所在は二つに分けられる。長子縣に設けられた場合と、壺関に設けられた場合とである。長子縣にあるものは、王才、王裕、王達、王景、王文進、王琮であり、壺関にあるのは、王明、王貞、王守廉である。

これらの人々の間に、昔の太原王氏に属するという親縁意識があったか否かは不明であり、その間の血縁関係もたどることはできないけれども、ある人々は長子縣におちつき、そこで定着した生活に入っただけであろう。例えば王達墓誌には「卒於私第」、王文進墓誌にも「終于私第」とみえ、而もそれぞれ長子城周辺に葬られているのであり、王景詮墓誌には「合葬……舊塋」とあるから、この一家の墓地は、代々長子城西北三里の地にあったわけである。勿論、王琮祐附墓誌に

は、「痾買新塋」というから、王琮の時に始めて墓地を設けたかの如くに見えるが、それは恐らく「丹城北原三里」の地の墓地が始めて設けられた、というものにすぎぬであろう。この王琮の祖先が早く長子縣に移住したことについては、「後因官長子。隨任不迷。紀歷春秋。續成基緒」(王琮祐附墓誌銘)とみえる如くで、従って王琮の設けた新塋の外に、既に旧塋が存在していたに違いないからである。

以上のように、これらの人々は長子縣に住み、その地に葬られたと考えられ、従って、王文進が「長子縣王始村人」といわれている如く、この地を本貫と定めていたと思われるが、ただ王達墓誌によれば、「太原人也。祖因官遂爲上黨人。」とみえ、これを「上黨人」——上党縣の人と考えれば、彼は本貫を上党縣につけながら、何かの事情で長子縣に移住し、そこに私第を設け、墓地を設けたということになる。この場合、現本貫と生活地とが別であったということになるが、例えば韓祐墓誌によれば、「上黨壺關人」といいながら、墓は「葬於長子城南十里堯山之東麓。」とみえているのも同様な場合である。しかし、もしこの上党を「上黨郡」の意に解すれば、王達の場合、太原郡の人が上党郡の人になったことになり、彼が長子縣に生活し、長子縣に葬られた事実とも矛盾するわけではない。そう解することは別に不自然ではないので、例えば王守廉墓誌によるに、「太原之雅望也。遠祖從官。因居上黨焉。」とみえるが、この場合の上党は上党縣ではなく、上党郡或は上党地方とみるべきである。というのは、この一家の場合、王守廉の曾祖崇智の時に既に壺関縣に在住していたこと明らかで(王守廉墓誌)、この一家は早くから壺関におちついていたと見るべきであるからである。王達の場合も、このように広義の上党と考えてさしつかえなからう。

一方、壺関中心の王氏についてみるに、王明墓誌には、「卒於私第」とみえ、王貞墓誌には、「終于家」とみえるが、それは王明が「潞州壺關人」とのみしか記されていないことと合せてみれば、ここで生活し、ここに葬られたといえるように、「太原人也。遠祖鍾晉朝上黨太守。子孫因而家焉。」(王貞墓誌)といわれる王貞の場合も、すでにふれた王守廉の場合と

同様に考えてよいのではなからうか。かくて、これら王氏に属した人々も、この地におちつき、この地の人になり切っていたといえるであろう。

以上の外の、隴西の李氏、清河の崔氏、隴西の申屠氏、青州の暴氏等についても、ほぼ同様の状態を指摘できるが、煩をさけて今は省略に従いたい。

さて、これらの諸氏について一言述べておきたいのは、これらの家々が潞州に定着していたことの証拠の一つとして、墓地の旧いことがあげられる。例えば、前掲の墓地の記載をみるに、田万章の條には、「先祖塋内」とみえ、張周抗の條には、「大學之右」とみえ、王景詮の條には、「舊塋」とみえ、王守廉は前述のように、曾祖崇智以来の墓に葬られたと考えられ、或は申屠暉光、申屠府君は同じ伝来の墓地に葬られたのであろう。このように、先祖伝来の墓地があることの明らかな場合はいうまでもないとしても、そのような表現が見えなくても、早くからこの地に移住した家々にとっては、必ずやそこに先祖伝来の墓地が設けられていたに相違ない。例えば、梁処士墓誌によれば、

「金城人也。遠祖芬官上黨。子孫因家焉。今爲潞州大都督府長子人也。」

とあって、その祖先以来長子縣に居住していたと思われるから、「縣城西北三里之原」に葬られた梁処士の墓地も、祖先伝来の墓地と推定される。或は又、雍君墓誌にも、

「其先、淮南雍齒之後。因官而住斯。爲……當郡屯留縣^(マヤ)地人。」

とあり、その墓地は、「屯留縣東北十七里平原。」とあるのをみれば、屯留縣に居住した祖先以来ここにいたわけであり、従って、雍君の墓地と祖先の墓地とは同一であったと考えるのが自然であろう。このように、恐らくは移住して定住した大部分の人々は、その祖先伝来の墓地に葬られたであろうし、それだけこの人々は、この地に永く土着していたことが察せられる。

以上によって明らかな如く、潞州方面に移住していた人々は、その郡望を称し、その出自を誇ることはあったとしても、隋唐時代には潞州の地に定着し、ここを生活の場とすると共に、この地を墳墓の地とし、故郷と定め、ここに本貫をつけていたと考えられる。このように、全国各地からその郡望を背負いながらこの地に流入した人々が、ここにおちつき、この人となった場合、自らそこに生まれてくるのは、これらの人々の地縁的結合であり、これらの人々による地縁社会の形成であろう。

いま、そのような点を明らかにするために、この地の婚姻関係を考えてみよう。ただ一言ことわっておきたいのは、単に夫人が王氏であつたとか、陳氏であつたとしか記していないものが可なりあるが、これらは一応省略するの外はあるまい。少くとも郡望なり、現本貫地なりを明らかにするものに限ると、多少その数は制限されることになる。

- (1) 陳留蔡儒夫人太原王氏 (蔡儒墓誌、今、長子県付近人)
 - (2) 隴西李君夫人北平田氏 (田氏夫人墓誌、李君、今潞府城人、田氏、今潞府人)
 - (3) 北平田萬章夫人清河崔氏 (田萬章墓誌、今、潞府城人)
 - (4) 清河張周抗夫人廬江何氏 (張周抗及夫人何氏墓、今、長子縣人)
 - (5) 太原王景詮夫人西河宋氏 (王景詮墓誌、今、長子県人)
 - (6) 太原王貞夫人趙郡李氏 (王貞墓誌、今、上党県人)
 - (7) 清河崔虞延夫人趙郡李氏 (崔虞延墓誌、今、屯留県人)
 - (8) 清河崔昭夫人河内常氏 (崔昭墓誌、今、屯留県人)
 - (9) 清河張叔政夫人西河宋氏 (張武及夫人韓氏、墓誌、今、張子縣人)
- 清河張武 (前) 夫人南陽韓氏

(後) 夫人天水趙氏、上谷寇氏

(10) 隴西牛貴夫人隴西李氏 (牛延宗墓誌、今、上党人)

(11) 咸陽秦愛夫人太原王氏 (秦愛及夫人王氏墓誌、今、壺関人)

(12) (?) 范沼夫人太原王氏 (范沼墓誌、今、長子人)

(13) 淮南雍元夫人南陽張氏 (雍君墓誌、今、屯留県人)

(14) 隴西牛高夫人扶風馬氏 (牛高墓誌、今、上党潞城人、馬氏、今黎城人)

(15) 徐州太山□堯夫人代州

鴈門申屠氏 (□堯墓誌、今、上党人)

(16) (?) 陳平夫人南陽樂氏 (陳平墓誌、今、壺関人)

(17) (?) □元夫人青州暴氏 (□元墓誌、今、上党人、暴氏、今、上党人)

ここにあげた僅かばかりの例でも明らかなように、これらは全国各地の郡望をもつ人々間の婚姻であることからみて、全国から此の地に移住してきた人々の間におけるものであったといえよう。しかし、婚姻が成立するためには、両者の単なる接触というだけではなく、両者をつつむ地縁的社会的関係があり、その結果としての婚姻の成立であったと考えられる。

この場合注目されるのは、男女共に潞州の地に本貫をつけている場合と共に、少くとも男女の何れか一方は潞州の地に現住し、且つその地の人となっている場合があることである。後者の場合、片方のみしか潞州の地に本貫をつけているのが明らかでないにしても、恐らくはその相手方も、同様に潞州に本貫をつけていたと推定しても誤りあるまい。婚姻が密接な地縁性に立つものなら、そう推定することこそ正しい考えであろう。ここにみる婚姻は、そのような潞州という土地

に定着し、ここに本貫を定めた人々の間におけるものであったにちがいない。

こう考えてみると、全国各地からこの地に移住し定着した人々によって、一つの新しい社会生活圏が構成されていたと考ええてよく、そしてそれは、第一章にみた如く、地方における地方官僚家中心の上流社会階層に属するものであったことは、男子の家系が代々の地方官僚であったこと（例えば、王才墓誌、王裕墓誌、王明墓誌、崔玉墓誌、崔言墓誌、申屠義墓誌、申屠行墓誌等参照）をみれば、その相手たる夫人の家系も相似たものであったと思われることによって推察されるが、ただ、「山右冢墓遺文」には、夫人の父祖の姓名、官職についてのべるものが乏しいので、詳細に言及できないのは残念である。

第三章 新らしい地方郷邑社会の成立

では、全国各地から、唐代の相州や潞州の地に、人々はどのようにして集まってきたのか、何故に彼等は先祖伝来の郡望の地をすてて移住し得たのか、などについて考えてみたい。これらのことを明らかにすることは、これらの地方に、新らしく生まれた社会生活圏が、全国各地から移住した地方官僚による、地方上流階層の生活圏——新らしい郷邑社会——であったとする前述の考えをも明らかにすることになるであろう。以下、その為の史料を摘出してみる。

I 鄴下冢墓遺文の場合

- (1) 「其（先）、燉煌郡人也。其因仕鄴。今卜居焉。」（康愨墓誌）
- (2) 「趙郡人也。……歷官天池。遂居安陽人也。」（李二墓誌）
- (3) 「廣平列人也。因官徙居鄴。遂爲相州安陽人焉。」（靖策墓誌銘）

- (4) 「其先、扶風人也。因任播遷。遂爲相州安陽人也。」（馬師墓誌）
- (5) 「其先、武陽人也。因官宅此。遂爲林慮人焉。」（苑策合遷誌）
- (6) 「其先、趙郡人也。……養志山泉。遂爲林慮人焉。」（寇恭及夫人墓誌銘）
- (7) 「其先、京兆人也。因官食稅。遂居此焉。」（徐懷隱墓誌）
- (8) 「長安杜康之胤。……六世祖仕於北齊。家於鄴。今爲相州安陽縣人焉。」（杜欽墓誌）
- (9) 「安定郡人也。……爰訪林泉。遂爲相州林慮縣人也。」（梁義方墓誌）
- (10) 「弘農人也。祖禰因官遂居此矣。」（楊君檀夫人墓誌）
- (11) 「其先、平原人也。遠祖因官。遂家于鄴。」（高荆玉墓誌）
- (12) 「廼祖官遊。因家彰滏。今爲鄴中人也。」（處士暴莊墓誌）
- (13) 「其先、隴西郡人也。遠祖仕魏。爲鄴城人焉。」（辛庭墓誌）
- (14) 「其先、出自武威。因官河北。今爲安陽縣人也。」（段子墓誌）
- (15) 「其先、清河人也。遠祖遷官。因爲安陽人焉。」（張漢墓誌）
- (16) 「其先、渤海人也。……遂留相土。今爲安陽人焉。」（高珍墓誌銘）
- (17) 「蕭氏之先、蘭陵人也。……因官遂爲相州安陽人也。」（蕭復興墓誌銘）
- (18) 「其先、太原人也。子孫奔葉。因官相部。家焉。」（王忌墓誌）

ここにみる十八例の中、(6)及び(9)が、この相州の山泉を愛してここに定着した、といっているし、(10)はどのような理由でおちついたか明らかでない。この三例を除いた十五の例は、相州に移住・定着した人々は、相州の地の官僚として赴任し、そのまま定着したという筋道をたどって、この地に本貫をつけたものようである。勿論、その赴任移住の時期は、

遠祖などといわれる如く、何時の頃かはつきりしない場合も多く、魏王朝等の如く明記するものは少く、確定し難い場合が多い。しかし、何れにしても、この地に定着したのは、その祖先が地方官として赴任してきたことによる、といえそうである。

II 山右冢墓遺文の場合

- (1) 「本陳留郡人也。先祖從官居潞。因而家焉。」（蔡儒墓誌）
- (2) 「其先、陳留人也。……遠祖從官。因居於潞長子縣焉。」（蔡崇敏墓誌）
- (3) 「隴西人也。李嵩之洪胤。因官遂居此邑焉。」（李賈墓誌）
- (4) 「其先、隴西人也。隋朝徙居上黨遂爲上黨人焉。……公季子希玉、任幽州莫樂府折衝。轉居范陽。今爲范陽人也。」（李經墓誌）
- (5) 「上黨人也。其先自太原。遠祖因官上黨。子孫遂爲土人焉。」（郭馮德墓誌）
- (6) 「太原人也。……遂因祖官居焉。廼爲大都督府潞城縣人矣。」（郭件墓誌）
- (7) 「令望太原郡人也。因官遂任。遂爲上党雄山鄉人焉。」（郭全豐及夫人宋氏墓誌）
- (8) 「南陽人也。……祖諱斌爲尉長。□秩滿□志□□。遂居潞焉。」（張周抗及夫人何氏墓誌）
- (9) 「太原人也。祖因官。遂爲上黨人。」（王達墓誌）
- (10) 「太原郡人也。……後因長子隨任。」（王琮裕墓誌銘）
- (11) 「太原人也。遠祖鍾晉朝上黨太原。子孫因而家焉。」（王貞墓誌）
- (12) 「太弼之雅望也。遠祖從官。因居上黨焉。」（王守廉墓誌）
- (13) 「上黨屯留顯陽鄉孝義里人也。……太祖崔暉并、雍二州刺史。食邑屯留。」（崔玉墓誌）

(14)「清河人也。遠祖從官上黨。子孫因而家焉。」(崔嚴墓誌)

(15)「清河人也。因官上黨。封屯留侯。」(崔石墓誌)

(16)「先先、清河東武城人也。十二世祖渾……遷上黨太守、屯留侯。」(崔虞延墓誌)

(17)「隴西金城人也。漢丞相嘉之後。因官而此。遂居斯邑。」(處士申屠宝墓誌)

(18)「金城(人)……是以因官遷邑。今爲上黨人也。」(申屠義墓誌)

(19)「金城人也。因官宅此土。今爲縣人焉。」(申屠行墓誌)

(20)「金城人也。……昔因官歷任。……今因子孫卜居潞城。乃爲潞人焉。」(申屠府君及夫人賈氏墓誌)

以上の外に、同じような例をなお二十例ほどあげることができるが、煩雑なので省略に従うことにする。ここにあげた二十の例からみても、移住の理由を明らかにせぬものや、或はこの地方に封ぜられたが故に、というものもみえる。しかし、それらは極めて少数で大部分の例は、鄴下冢墓遺文の場合と同様に潞州地方の太守、或はその他の地方官として赴任し、そのまま此の地に居ついて、土地の人間となったもののようである。土着の時期については明言するものは少いが、やはり「遠祖」という表現が数多く見られる。それからみれば、これらの家々は可なり以前からここに土着し、此所の人となったものから、本人になってこの地の地方官僚になり、ここに本貫を定めたもの(19申屠行墓誌をみよ)まで、色々の場合があつたようである。

しかし例えば、(4)李経墓誌にみえるように、隴西の李経は隋朝になってここに移り住み、彼の末子希玉は范陽に官職を得て移り住み、范陽の人となったというのをみれば、そのような移住と移貫とは、しよつ中行われたと考えられよう。すなわち、可なり旧い時代から、このような移住、そして移貫へという経過は、常時行われて隋唐に及んだといえそうである。

さて、以上に相州、潞州の家々についてみてきたが、彼等の祖先は全国各地から、その祖先伝来の地を去って、相州或は潞州にうつり、その地に本貫をつけてその地の人となった。そういうことは、相州・潞州においてのみならず、他のどの地域においても、同じように行われた日常一般の現象であつたに違いない。例えば、太原王氏に属した人々は、襄陽にも、相州にも、潞州にもみえ、清河出身の張氏に属する人々も襄陽・相州・潞州何れにもみえ、安定出身の梁氏に属する人々も襄陽・相州・潞州の何れにもみえ、隴西出身の李氏、太原出身の郭氏なども同様である。ただ、襄陽冢墓遺文に見える家は少いので、三地方に共通するものはそれほど多くないが、相州と冢州に共通する家は、それぞれの遺文を比べれば非常に多いのである。このような事実は、同じ郡望を負うた人々が全国各地に分散したこと、それが決して特別の場合ではなく、通常一般の現象であつたことを思わせる。（別に發表予定の「隋唐時代の上層郷邑社会（そのⅡ）」に他の例証をあげている。）

このようにして、全国的に行われた、そのような地方官僚としての立場における生活根拠地の移動と、それによって生ずる赴任地への定着―郡望の消滅と新望の成立―があつたであろう。全国的規模における地方官僚層の移住・移貫が、通常の行為として行われ、その地域に移貫した人々の間に、地縁關係を通じて婚姻その他の社会生活的關係が発生し、一つの連帶關係が生まれてきたようである。これは、それぞれの地方における、新しい郷邑社会の成立を意味するものではないだろうか。

では、地方官僚層のような移住移貫を可能ならしめたものは何か、が問われねばなるまい。それが通常の行動として行われ得たことの意味はどういうことなのであろうか。

結 語

さて、前漢から後漢にかけて、地方社会の中心を形成していたものは、いうまでもなく地方郡縣に土着していた、政治的にも社会的にも、又経済的にも極めて強い実力をもっていた豪族達であった。その豪族達は、一族から多くの地方属僚を出して、郷党の意見の代弁者として、中央から派遣された太守、縣令も一目おくほどの勢力をもっていた。従って、豪族達は祖先伝来のその地を愛し、その地の出身であることを誇りとしていた。この祖先伝来の故郷が彼等の郡望であつて、彼等が移住することがあつても、仲々去ろうとしなかつたものであつた。

このように、それぞれの地方には土着勢力が存在し、それらの人々は時には抗争することはあつても、一般には平和な協調的生活を送っていたと思われることは、別に指摘した如くであつた（拙著「門閥社会成立史」所収、「後」）。このような地方勢力としての安定した地位がある以上、後漢時代に豪族の官僚化がすすみ、中には中央官僚化する家もあつたが、大方の彼等は、依然として地方官僚たることで満足し、その生活の根拠地を故郷におき、そこを離れて移住することも少く、移住することも非常に少なかつたと思われる（拙著「門閥社会史」所収、「六朝門閥」の社会的・政治的考察」第一篇第二章）。

ところが、隋唐時代の墓誌を中心としてみてきたところによると、それら豪族達の子孫が、地方官僚として全国的な規模での移住をし、更に移貫もしているわけである。この場合、彼等をして容易に他地方に住移せしめたものは、一体何であつたのであろうか。

私はその理由を、第一には政治的側面、第二には経済的側面から考えてみたい。まず、第一の側面についてみるに、隋朝の、中央集権体制による、地方官掌握があつた。浜口重国氏「隋の天下一統と君権の強化」（『秦漢隋唐史の研究』下巻所

収)なる論文によれば、

「今迄州郡縣の長官は己が官庁の中、次官級、部長級のもの若干を除いた大多數の官吏の任用権を付与されて居り、甚だ大きな権限を持つて居りましたが、隋が天下を一統してからは、州縣の課長級どころは勿論のこと、少くとも『從九品下』以上の官位にあるものの任用は、一切天子の手に回収して了った結果、今後地方長官は胥吏雜任の如き極く下っぱの連中の任用権しか与えられず、甚しく権限を縮小されたことであります。……彼等を任命するに当っては出身方面を避ける、換言すれば他地方の人を任用するという原則を樹立したのでありますから、その結果は、地方政治に対する地方人の協力、乃至は干涉容喙の余地を残さず、一切中央の意志でやって行くと言った形になった訳であります。」

と述べられている。すなわち、隋に及んで中央集権体制は極めてきびしくなり、從九品下以上の地方官は中央政府の意のままに任用され、而も出身地の地方官は任用しないことになった。従つて、隋朝に於ては、「地方官庁の中で少しく地位がよく、権限もある様な官の任命権は全部天子の手に収めて了ふ」(「浜口氏同上論文」ということになったので、中央から派遣されるそれら地方官僚は、自己の出身地以外の各地を転々とするることになり、その移動の間に自分の終生の生活の場を定め、その地を本貫として定着せざるを得ないようになつたであらう。

第二の経済的側面からみるに、彼等がその移住を不可能にするようなもの——例えば土地やその他の財、或は地方郷党に對する支配力とか何等かの特権とか——そのようなものを持たれなかつたからである、と考えるではなからうか。

漢代の豪族達は、その一家から中央官僚を出す場合、その一家の誰かを故郷——生活の本拠地——に残したが(前漢書七十三韋賢伝)、それは祖先の墳墓の祭祀と共に、土地・財産の管理ということがあつたのであらう。豪族が土地に基礎をおく勢力である以上、当然のことであつた。ところが後漢末から唐代に至る間に、特に東晉以降となるや、移住が大規模に行われると共に、人々の土地に對する執着がうすれていったようである。それは南朝における郡望からの離脱の傾向によつ

ても推定されうる（前掲、拙稿「郡望と土断」）。

このことは、少くとも官僚化した人々の生活は、土地を離れて成立しつつあったことを意味するものであろう（拙著「門閥社会成立史」序章、参照）。すなわち、寄生官僚制の普遍化である。後漢末には、俸禄生活者としての中央における高級官僚社会に対して、地方になお豪族勢力を基盤にもつ地方官僚の土着的世界があったが、今や隋唐の時代には、地方官僚も亦、俸禄生活者となつて、郷党との関係がうすれ、土地から離れた生活をしていた、と考えられるのはかろうか。というよりも、中央権力の命令によつて、その出身地以外の地にしか任官できないとなれば、彼等が官僚であることを止めない限り、土着性をなくし、寄生官僚化するより外に生活の道はなかったであろう。そうでなければ、上述したような「全国の各地から、全国の各地に」と、離合集散する社会状態を考えることは不可能であろう。

このようにして、全国各地から、全国各地への移住・移貫によつて、地方官僚による、新しい上層郷邑社会が成立していった、といえるのではあるまいか。それを裏附けるものは、各地出身の地方官僚間の婚姻であろう。彼等は地方官僚家によつて構成される上流社会階層に属し、且つ、相州とか潞州という地縁関係によつて結ばれていたもので、新らしく定着した新しい本貫地において、相互連帯の新たな郷邑社会をつくり上げていったと考えてよからう。そこには、後漢時代の末期の襄陽蔡氏にみるような豪族中心の婚姻関係（上田氏「後漢末期の襄陽の豪族」）、土着性の強い婚姻関係ではなく、移住者としての地方官僚間の婚姻関係に見られるように、寄生官僚化した家々による社会階層が成立し、旧い望にとらわれず、新しい地縁を大切にする郷邑が成立していたと考えられる。

以上